

首無し騎馬武者と日時についての一考察

永島 大輝

はじめに

柳田國男は「妖怪名彙」の中で次のように首無し馬を紹介する。

クビナシウマ 首無し馬の出で来るといった地方は越前の福井にあり、また壱岐島にも首切れ馬が出た。四国でも阿波ばかりでなくそちこちに出る。神様が乗って、または馬だけで、または首の方ばかり飛びまわるといふ話もある。⁽¹⁾

まず福井の例をあげている。今回本論文では福井の事例をメインに取り扱うが、これまでの先行研究では柳田以降、福井の首無し馬を主として研究したものはない。⁽²⁾

「身体欠損のある動物の怪異」という基準で事例をあつめた。これに関しては収集の段階で昔話と分かるものは除いた。一七〇例程の事例中、三十二事例が日付があった。⁽³⁾しかし、そ

うした日付があるものは、首切れ馬に遭遇したという話はほとんどない。

逆に、首切れ馬に遭遇した話のほとんどは日付がないことがわかった。例を挙げると「隣村の高畑の某は板野郡大山村で首切れ馬に出逢い、追いかけて頭後ろから背喰い付かれたが綿入れの厚い衣類を着て居たので、上の分だけが喰破られ身体は無事であった。」とか「子供の時、宅に出入して居た魚の行商人嘉吉といふ男から聞いたのは、この男が夜更けて名東郡国府町矢野にさしかかると、予て噂に聞いて居た杉生山の方からジャンジャンと鈴の音が聞こえて来る。てっきりそれだと思つて草履を脱ぎ頭上に載せ（阿波では怪物に出会つた時には履物を頭に頂くと難を免れると信じられて居る）道傍に伏して居ると、その前を行き過ぎたが、闇にすかして見ると果たして首の無い馬であった。嘉吉はモウ怖くて帰る気にならず、付近の人家を起こして朝まで其の所で過ごしたという」や豚ではあるが「母はよくクビキラウワー（首切れ豚）に出会つた。道を塞ぐので、

「私は天皇陛下のお使いでこんな夜道歩いているのですから」といったら、藪のなかに逃げて行ったという。(竹下徹さん談)⁽⁶⁾というものになる。このように遭遇した話と日付のある話について考えてみたいというのが初発の動機である。そのためには一つの地域の同じ怪異妖怪で見ているのが良いと考え福井の首無し騎馬武者に焦点を当てた。

一、怪異と日付の関係

これまで妖怪の話はどこまでを一つの話としてよいかあいまいであったように思う。

沼ヶ盛の頂上の近くに鞍掛け沼という大きい沼がある。沼倉城主沼倉飛驒守が蒲生勢との戦いに敗れ、羽後に向かう途中、沼ヶ森で愛馬が湿地に足を取られ、動けなくなった。ところが、そこから清水が湧き出て、たちまち沼と化し、飛驒守の足跡を隠した。飛驒守は「この沼の主になれ」と言っていて、泣く泣く愛馬を刺し、追っ手を逃れた。旧暦五月五日の明け方のことで、それから三年に一度、この日に馬の首と黄金の鞍が浮かび上がるといい、それを見た者は三年のうちに死ぬという。ある時、玉山のおつき、おみつという姉妹が近くでわらび採りをしていたら、突然水面が揺れ動き、馬の首と黄金の鞍が浮かび上がった。姉のおつきは他言したため一

年後に急逝し、妹のおみつは盲になったという。⁽⁷⁾

もちろんこれが一つの話である。ところが日付の有無で考えると、前半の「五月五日には三年に一度馬の首と金の鞍が浮かび上がるようになった」という話と後半の「ある時、姉妹が怪異に遭遇し不幸な目に合う」という二つにわけられよう。

前半の日付のある怪異譚は伝説的であり、後半の日付の無い怪異譚は世間話的だと言える。

伝説と世間話はあくまで研究のための分類であって、話者がそれを意識して区別し話していることは基本的にない。

これはのう、ずうーつと大畝という。ここであいうたら高知県と愛媛県との境に通しの畝(尾根)というところがある。山から始まって海なら海、山なら山まで一つもその畝が切れずにつづく、通しの畝がある。なわめの道という。魔ドウ道ともいふんじや。それには、牛や馬を繋いじよいても、ぜったいがかつとらん。ひとりでに綱がとけておる。

歳の晩にこを歩きよつたら出会うらしい。魔年の晩いうて、旧の歳の晩いうて、旧の歳の晩(節分の夜)がありましよう。それにはいなげな(奇怪な)モノがおるそうなで。それがぬたば(猪が体に泥をこすりつける場所)いう所があつて、それへむけて全部行て、人を化かいたりするような外道のモノ(魔モノ)がみな集もる。魔ドウいうモノは、殺生人(獵師)

が行て、弾を撃つても、茶釜の音がしたとか鍋の音がしたとかいうて、あたらないだいうの。頭に金物を被つちよるけ、五体いっぱい金物を被つたのがおるんなあ。

(中略)

畝(尾根)には魔ドウの道がなんぼもあつて、何百おるものやら、みなが通りよる。それが嘘と思やあ、牛というものを繋いじよつてみよという。越知面の井の谷の、部落の公会堂の表の道の、川のまん中に大けな石があるんよ。三間ばあ(ばかり)の大岩がある。馬でも牛でも水を漕いで遊ぶけ、体を冷やいたりするにや良えとこよ。岩の表ひらへ長い縄つけて、岩の上の木につなげとくんじゃ。良えとこでよう繋ぎよつた。ところが、人間のおる間は解かんぜ。人間がおらんようになつたら、いつとなしに解いてしもうて、放しで遊びよる。そういう生き物を取つて食うものが来るんじやなあ。⁽⁸⁾

魔年の晩(節分の夜)という日付が明確な、金物を被つたモノが通るという知識と、日付が特に指定されず実際に遭遇した牛の縄が解かれる体験が、「魔ドウ道」というくくりの中で一緒に語られている。

日付のある怪異は物忌みなどの行事とも関係しており、知識はあるが実際に不思議な現象に遭遇することはないのではないか。

一例として、次のような行事が現在も行われ、それに付随す

る話が存在している。

栃木県足利市板倉で行われるオカエリという行事である。「旧十月は神無月で国内の神様が出雲大社に集合し、旧十一月一日にそれぞれ国元へお帰りになります。板倉神社は出雲大社と親戚の為、残務整理で一足遅れて旧十一月初午の夜帰つてくるといわれ、この夜に「神迎祭」が行われます。帰ってくる神様を迎える行事ですが、この神社の神様は非常に醜い顔をしている為人にみられることを嫌うといわれ、必ず夜に行くと定められています。帰路は静かな行列となつて神社に戻ります。市指定の民俗文化財となっています。」(足利市観光協会の看板による)

この祭りの後に板倉の隣の松田の集落では忌みが行われる。⁽⁹⁾聞き書きとしては、中島久雄さん(一九四一年生まれ・二〇一五年に聞き書き)「これから松田(地名)のほうは神様をみると三年以内に死ぬとして家から出ないそつだ。また、板倉(地名)で十二日間神社に行けず今年は偶然一月一日に行けるが、数年前は三日まで行けなかった。もともとと神主は歩きだつた。途中で馬に変わった。今は車で松田まで行く。馬は足の代わりとして使つていたのではないか」というものや、近藤さん(一九四二年生まれ・二〇一五年に聞き書き)「松田の人は、白い馬に乗つた神様を見ると三年以内に死ぬとして外へ出ない。神様は片眼がないとか顔が醜いといわれる」という話を聞くことができた。

柳田は「祭りから祭礼へ」の中で神霊を神馬などで迎える事例をあげ、「その時刻家々の燈火を消さしめて、誰にも見られぬ

ようにして御わたしを仰ぐ例さえあった。片輪車の恐ろしい伝説もこれから起こり、伊豆七島の正月二十四日、忌の日（キノヒ）とも日忌様（ヒイミサマ）ともいう祭には、赤い帆を掛けた神の船が海を渡ってくる、それを見たものは死ぬとまで伝えていた⁹と述べている。首のない馬もこれに類する発想だろう。忌みの際に見てはいけないといわれる神は理由として顔が醜いとか片目であるなどといわれるが、それと同じく首がないというのも同じ機能を有しそうである。

実際に遭遇する話と日付があり怪異に遭遇はしない話がある。もちろん例外がある。日付があるにも関わらず遭遇する話があるのだ。

たとえば『遠野物語』の雪女である。

一〇三 小正月の夜、または小正月ならずとも冬の満月の夜は、雪女が出でて遊ぶともいう。童子をあまた引き連れてくるといへり。里の子ども冬は近辺の丘に行き、櫓遊びをして面白さのあまり夜になることあり。十五日の夜に限り、雪女が出るから早く帰れと戒めらるるは常のことなり。されど雪女を見たりという者は少な¹⁰し。

ここにはすでに小正月の夜には怪異に遭遇するということが言われているが、実際にその日に遭遇したという話はむしろ少ないということが書かれている。

二、福井の事例から

福井から次の首無し馬、あるいは柴田勝家の伝説をあげる。

【事例1】眞雪草紙¹²

柴田勝家 柴田勝家の居城、福井の城二ハあらず、今ノ鳩ノ門内杉田氏ノ邸宅邊なりといふ。毎年勝家の戦没の日二、大橋（九十九橋）邊・毛矢邊を、勝家が馬に乗りて馳驅スルヨシ。よつて祥月日二ハ、誰レも恐れ憚りて、六時今ノ六時頃より戸をメテ夜行をなさずと。

【事例2】寺門良隆「首無し行列の話」¹¹

越前福井では昔は舊暦四月二十四日の晩は、柴田の軍勢が勢揃へすると言つて、市内九十九橋の上に數多の火が點るのを、橋南や新橋（大橋即ち九十九橋の七八町上流、昔は渡船場）の人は見に出ることであつた。此行列は舊御船町や神明神社前、中の馬場邊を通行するが、何處から出て何處へ行くかは分らなかつた。數多の共人は、皆白装束で、足音も至つて靜かに、大將は馬に乗つて居るが首が無かつた。此行列に出逢つた人は命が無い。多くは血を吐いて死ぬ。神明神社前の島田某の家の馬丁は、この二十四日の夜、野外に何かさはく音がするので、長屋の窓から見たら、白装束の行列であつた。

翌朝々飯の時に、顔色が悪いので家の者が尋ねたら行列を見たと言ふて血を吐いて死んだ。又水野某と云ふ侍は堂形（今の福井驛の邊）に住んで居たが、もと此家の下女であつた者が老人になつても出入りをして居た。此も二十四日の家主家からの歸りに新橋邊で此行列に出會つた。それで道を脊にして行列の通るのを待ち、家に歸つて子供に此話をした。家の者は心配して外出せしめなかつたが、翌年の此日行方不明になつた。翌日探したら新橋邊で川に溺れて死んでゐた。此話は今から百年ばかり前の事である。又同じ四月二十四日の夜、鳩の門（今無し、裁判所の邊）の枀形に月の影が映ると云ひ、此夜この枀形に入つた者は出られぬと云ふて居つた。

【事例3】杉原丈夫『越前の民話』⁽¹³⁾

城が落ち、勝家が自害したのは四月二十四日である。それ以来毎年四月二十四日になると、首の無い人が白衣を着て、白い馬にまたがり、しずしずと行列をつくつて町を行く。この行列を見た者はみな死ぬ。戸のすき間からのぞき見しても死ぬ。しかし一説によると、この行列に出會つたとき、「柴田勝家の家来」と言わねば命がない。また別伝によると、行列に出會うと、行列が「お前は誰か。」ときくから、そのとき答えるのだと。さらに別の説によると、「天下の名将柴田勝家公」と言えばよいのである。またある説によると、行列が出るのは四月二十四日に限らず、ほととぎすのなくころは毎晩出るのである。（昭

和十年ごろ、わたしが多くの人から聞き集めた）

【事例4】河合千秋編『福井県の傳説』⁽¹⁴⁾

柴田勝家の亡霊

天正十一年四月二十四日、この日は賤ヶ岳の敗戦から脱がれて帰城した柴田勝家最後の日である。柴田神社のお祭りは此の日に行われるが、以前は神社といつても舊鳩の門内杉田六太夫屋敷の一隅に苔むした石祠とこれを包んだ森とがあつたのみでいかにも物凄く拝まれた。

明治の御一新までは、毎年其の日の夜に入り藩公の代参が立ち、杉田屋敷内から石祠までの道筋は鯨幕を張つて人目を蔽われた。それのみでなくその夜は當の杉田屋敷をはじめ隣屋敷もその隣屋敷も門を打ち雨戸を閉して決して表や外を見ないことに慎んだ。それは二十四日の夜には首無し馬に跨つた柴田勝家公の亡霊が通られ、これを一目でも見たものは必ずその年のうちに死ぬといわれ、禁を犯した隣屋敷の仲間や刻限を間違えた朝市行きの肴屋が亡霊に睨まれて案の定その年に死んだという実例も口から口へ上されて居る。代参の立つ夜の九十九橋から本町を経て佐久良御門を入り鐵門を通り下馬御門前から鳩の御門内へかけての町筋、屋敷筋も悉く大戸を叩し門を打つたことも杉田屋敷付近と同じことであつたという。

【事例5】『南越民俗』六号⁽¹⁵⁾

柴田勝家の亡霊（福井市）四月二十四日柴田勝家の命日は柴田神社の祭りの日であるが、その夜には首無し馬に乗った勝家の亡霊が通り、それを見た者は一年以内に死ぬといひ、實例もある。道筋では戸を閉ざして外へ出なかった。（福伝）

【事例6】『南越民俗』十号⁽¹⁶⁾

別傳によると毎年四月二十四日後、首のない人が白衣を着て白い馬にまたがり、行列をつくってしずつくも橋を渡って行く。道で出会った者はもとより、戸のすきからのぞいて見た者も一年たたぬうちに死ぬ。一説によると、行列に出会ったとき、「天下の名將柴田勝家公」といえば、命が助かる。また別伝によると、首なし行列の出るのは四月二十四日に限らず、ほととぎすの鳴くころは毎晩であると。（杉原）

【事例7】田中貢太郎「首のない騎馬武者」⁽¹⁷⁾

（前略）

幕末の比、某と云う医師があつて夜遅く病家へ往つて帰つてゐた。それは月の明るい晩であつた。其の大手を通つてゐると、憂憂と云う夥しい馬の蹄の音が聞えて来た。続いて鎧であらう金属の触れあうような音も聞えて来た。おやと思つて見ると、騎馬武者の一隊が前から来ているところであつた。某は不思議に思ったが路の真中に立っていられないので、路

ぶちへ寄つて見てみると、騎馬武者の一隊は、其の前を肅々と通りすぎようとした。医師はどうした軍勢だろうと思つて見ると、其の武者にはどれもこれも首がなかった。はつと思つて眼を下へやると、それには何の影もなかった。

医師は驚いて家へ帰るなり、家の者を起してその話をしたが、しているうちに血を吐いて死んだ。それは柴田勝家の亡霊で、同地方では、それを見た者は死ぬと云われているものであつた。

【事例8】福井市 前田豊彦さん（一九四一年生まれ）の話

九十九橋に出るとのこと。首無しの騎馬武者が通る。見た人が必ず亡くなる。それなので、柴田神社でその祟りを無くそうとしている。その当時の近所の人が小さい祠を建てたのが（柴田神社の）始まり。（二〇一五年聞き書き）

【事例9】福井市 栗田信弘さん（一九四四年生まれ）の話

日付は忘れたが、福井城の裏門から首の無い侍が北へ向かつて走っていくというのを聞いたことがある。（二〇一五年聞き書き）

【事例10】福井市柴田神社 松田典起さん（宮司）の話

勝家公とお市の方が亡くなった後、夜な夜な首の無い武将が九十九橋、旧の北陸街道に出た。その霊を慰めるために、祠を

建てた。明治六年に国あるいは県から称号を得た神社になった。今では四月二十四日に例祭をやっている。明治になってから出来たものなので、旧で例祭をやっていたことはない。新暦四月二十四日に例祭が行われている。(二〇一五年聞き書き)

【事例1】の時点では「首のない馬」や「首のない柴田勝家」といったエキセントリックなものが記されていない。それはこうした記録の性質によるものだろうか。それとも、異説があったのだろうか。

このように習俗の伝説となっているものの例をあげる。愛媛県の話である。

今から大体四〇〇年ほど前の戦国時代の話じゃがの、和田に祖母井城があろうが。じいちゃんや、お父さんが八月七日の七夕の日に「おせがき」に行きなはるが、まだ分からんか、鐘をたたいてお念仏あげる日があるんじゃがの。その祖母井城に祖母井左エ門尉之照というお殿様がおいでたそう。時は天文十三年七月十四日晚のこと。この日は、東宇山で盆踊りがあるので家来は皆踊りに行き、祖母井城は手うすになっていたそう。そのころ、この辺りで巾をきかしていたのが菅田城の大野直一族。大野はその日に祖母井城が手うすになることを知っていて夜、攻めてきたそう。祖母井城は攻め滅ばされてしもうた。ところがのう、奇妙なことに、その

翌年七月七日の夜明け方和田から久保の池のカミマキ井戸を通じて、一頭の首なし馬がバカバカとクツワの音を響かせて通るようになったと。その首なし馬の姿を見た者は病うので、村人はみんな七月七日(現在八月七日)の朝早くは外に出ないようになったと(後略)¹⁸⁾

これは遭遇する人物のいない話者から遠い話であるため伝説であるといえる。

【事例2】では旧暦四月二十四日ということになっている。この旧暦という考えや日付については現在の聞き書きでは聞くことができない。つまり重要ではなくなっているようである。

日付があるにも関わらず遭遇したものがいる。しかし記述をよく見ると「此話は今から百年ばかり前の事である。」と話者から時間的な距離のある話であることがわかる。このような例を愛媛県からあげる。

昔、年の暮れの大晦日(十二月三十一日)の晩になると、宮脇川の下の方を、鈴をつけた首のない馬に首のない人が乗って走っていたそうです。このことを知らない人が、大晦日の晩、宮脇川の下を通りました。昔このあたりは坂になっていて、竹藪がいっぱい生えていましたので、どうも気味がわるいなあーと思いながら歩いていると、遠くから鈴の音が、「チリンチリン」と聞こえてきました。なんだろうと思って、暗がりすか

してみると、首のない馬に、首のない人が乗って走ってきまし
た。その不気味な姿は、たとえようありません。あまりの恐
ろしさに、腰をぬかしてすわりこんでしまいました。こんなこ
とがあるので、ここの人は、大晦日の晩には、早くから戸を
締めて、外へ出ないようにしていたそうです。⁽¹⁹⁾

この例も世間話のようだが、冒頭には昔、とある。話者から
は時間的な距離が考えられる。首無し馬の事例以外でもおおよ
ね同じ結果が得られる。岩手県から一例をあげる。

末先の農神様 旧六月十五日は、農神さまのお祭りとして
いるが、この日は農家では、決して畠に出かけてはならない
とされている。この日には、農神さまが畠を守るために社か
ら出るのだという。そのため昔から、この日には畠仕事を禁
じているのだそうだ。昔末崎のある農婦が、この六月十五日
に、みなにしれぬように、そっと畠仕事をしていると、見上
げるようなポーズ（化物）にであった。すぐ戻ればいいもの
を、それをしないで事もあろうに、ポーズの袖の下を潜って
しまったのである。

ところが、たちまちその農夫は手も足もしびれて、とうと
う不具（かたわ）者になってしまったという。⁽²⁰⁾

【事例3】はいくつかの異説がある。四月二十四日には物忌み

をしなくてはならないという【事例1】や【事例2】と同様に
伝説的な話。

一方で世間話的な行列に出会い、その対処としての妖怪問答
譚が生まれている。

ほととぎすがなくころというのはどうしたわけか。

勝家の辞世の句には「夏の夜の 夢路はかなき 跡の名を
雲井にあげよ ほととぎす」とある。血を吐いて死ぬという【事
例2】【事例7】などもほととぎすとの連想が考えられる。ここ
では、勝家というキャラクターがほととぎすを引き寄せたのだ。
鳥が先ぶれをし首の無い馬に乗った武士が現れる例は他の地域
にもある。

ヨハトシ 夜半人、首無き馬に幽霊の侍が乗つて夜半に通る、
その時には水鶏が先きぶれする、灯の燈つて居るのが見えた
ら侍は入つて来る。但し爪を隠した人は助かる
奄美大島（八八二）⁽²¹⁾

世間話、つまりは話者に近く信じられている場合、このよう
に遭遇する危険性がある。

そのため日付のない話——つまりは怪異に遭遇する世間話に
はこのように対抗策が生まれる。

実際に忌むのであれば、会うこともない訳なのだが、そこは
習俗の伝説から世間話に変化したか、逆に噂が切実さを増し習

俗と組み合わせたのだ。

それは口裂け女が当初の不審者事案からやがて話の成長、物語化の初期段階として子供たちによる対抗策が生まれ、「ボマード」として逃げていく」というものに通ずるところがある²³⁾。私の身の回りでも、LINEのアカウントを乗っ取られるということが多くあった²⁴⁾。

ここまでは実際にある現象だろうが、アカウントを乗っ取られた友人が話しかけてくる際に「天安門事件」と返すと消えるという話を後輩から聞いた(二〇一三年)。ここにある発想としてはアカウントを乗っ取った詐欺をしているのは中国人であるということが暗にしめされている(もちろんそれが事実かどうかはここでは問題ではない)。

中国ではネット上で「天安門事件」については検閲され調べることができないという。そのため相手を排除できるという考えである。こうした対抗策が噂の中から生じることによって世間話は話としての強度を増す。

【事例5】や【事例6】は『福井県の傳説』や杉原のものがリライトされ短くまとめられているものであり、目新しさはない。ちなみに「妖怪名彙」²⁵⁾において「ミノムシ」のところで「南越民俗」が典拠としてあげられている。「首無し馬の出て来るといった地方は越前の福井にあり」という記述もこの「南越民俗」によったのではないかと推測ができる。

【事例7】は田中貢太郎の怪談集からである。

ここに日付はない。全国の読者にとって怪談を楽しむ上でその忌みを伴うような習俗は必要ないからである。

【事例9】は走る道の異説である。どうしてこの異説があるのか、こういう話が生まれたのかは今後の課題としたい。【事例8】や【事例10】は柴田神社の由来である。こうした伝説の例を徳島県からあげる。

現在の北馬部落は、赤石から那賀川町島尻まで、続いていた砂丘の一部で、この辺り一帯は竹藪が長く続き、その中を道が通じていたという。昭和十五年頃和田島航空隊に通じる道の建設作業中に、地下から壺型五輪の墓が出たという。そのむかし夜が更けると、ここの竹藪の中から、時々馬の苦しそうな、いななきが聞こえ、首無し馬が出て来た。部落の人達がその辺へ地藏堂を建てたところ、馬のいななきも止まり、首無し馬も出てこなくなったという。いまその地藏さんは北馬から中島方面へ通じる道の四つ辻に鎮座します²⁶⁾。

地藏の由来である。年中行事とは結び付かないが、その首無し馬のキャラクターは事物の伝説として生き残っている。

三、年中行事と怪異

妖怪からみてみれば井之口章次「妖怪の地域性」に「お化け

の中にも人望を集めやすいものと、人気のないものがある。中世以降に修験道の栄えた地方などには、天狗の活動がめざましい。裏山を持った農村では、お化けといえは狐かむじなのいたずらである。こういう地方では、もともと他のお化けが考えられていても、天狗や狐に引きつけられてしまい、特定のものに人気が移って、他の種目はいつともなく姿を消してしまうのである」とある。福井において首無し馬は柴田勝家の話になっている。

野村純一「口裂け女」その他（注（23）に同じ）でも昔話「喰わず女房」の中に口裂け女が出ることを例にしている。口裂け女とは昭和五四年の初夏の頃から話が確認でき、全国を席卷した当時かなり人気の高い新しい妖怪であったようである。その妖怪が「喰わず女房」に組み込まれている。また口承の世界には妖怪以外に目を向ければ人気のものに置き換えられる研究の蓄積は多い。²³⁾

怪異妖怪伝承において、その多様性を発揮するのは世間話である。実際には世間話にも伝説的な要素は紛れ込んでいる。その定義は話のされ方によって決まる。しかし、どのように語られたかということまで詳細に記述されている資料ばかりではない。妖怪は民俗学において俗信の範疇で研究されることが定石であったために、どのように語られていたかを記録されていることは少ない。その際に世間話か伝説かという一つの指標をこの日付の有無で得ることができる。

その一方で昔話や伝説が世間話になるということは多くある。事物の由来の、もう首なし馬は出ないという伝説があり、肝試しの際には今も出るかもしれないという「話者に近い話」にして語ったことを愛媛県東温市の武智成保さん（一九三九年生まれ）から聞いた。

和田義盛公がこの辺の豪族、河野氏に刃向って、平岡氏にせめられ滅びた。その亡霊がいまだにトノサマミチを吉山城へ向かって徘徊する。首なし馬のお墓が和田霊神。祟りを鎮めるためにつくって出なくなった。首なし馬はカボカボ足音がする。和田義盛につかえていた武士が乗っている。おそろく一頭で出るのではないか。

昭和二五年〜二六年くらいには肝試しをするときに首なし馬が出る、タヌキが出るという話をしてから行った。牛は各家に耕す動力としていたが、馬は見ない。神官が歩いていると、首無し馬が来て、祓の言葉か何かを知っていたので助かった。

（二〇一四年聞き書き）。

つまり口裂け女とは逆に伝説や昔話から世間話になっている例である。

ここには決して世間話は耐久性のない一過性の噂とはいえない事実がある。

また、噂は俗信と絡むことでその耐久性を高めることができる。

るのではないか。

当たり前だが多くの人は研究者のように毎日年中行事のことを考えているわけでもないし妖怪のことを考えているわけでもない。

ところがある時、伝説のようになって知識として残っていたものが再び世間話として息を吹き返す。

たとえば首の無い馬というキャラクターが多様な話の中を駆け抜けていくことがあるのだ。

まとめ

妖怪伝承は基本的に民俗学において俗信として研究されてきた。²⁹同時にその中心に据え置かれたのは、「昔話・伝説・世間話」のうちの「世間話」である。³⁰

なぜ日付のあるものは怪異に遭遇した話が少ないのだろうかという問いから本論は生まれた。

妖怪の話、つまり「世間話」から、日付のある「伝説」を取り出すことができると考えた。

首の無い馬とは別の怪異についてはまだ今後検討が必要になるが、おおよそ同様のことがいえるだろう。今回は首の無い馬を中心に据えさせていた。

もちろん、俗信や民間信仰の一つとして妖怪を捉えていたとしても民俗学者が「昔話・伝説・世間話」の分類は意識してい

るに違いない。

妖怪は今や民俗学ではなく様々な分野を横断して研究されるようになったが「世間話」と「伝説」の区分け、またはある話の一部分から「伝説的要素」を抽出することはこれまでの膨大な民俗学の聞き書き資料にも目安として簡単に使えるはずである。

首の無い馬は存在感が薄れ福井では首の無い柴田勝家に変化。禁忌を犯し実際に遭遇して血を吐いて死んだものがあるなどの怪談が生まれ、田中貢太郎などは特に日付に対しての意識はない。

特定の日付を忌むという話は消え、現在では事物の由来として話されていることが指摘できる。話の機能が変化してもその首の無い柴田勝家というキャラクターが流用されている。

かつては家の外に出ないという慣習があったが消滅したことが想定できる。

その慣習が消えた後でも、首の無い馬の話は残存したのだ。そして、口承文芸から、現在には失われた慣習や行事などがあつたということが言えるとなれば、他の民俗分野の研究（たとえば年中行事など）との連関もできるだろう。

附記 本論文は、二〇一六年六月五日に行われた日本口承文芸学会第四〇回大会（於 北海道大学 人文社会科学総合教育研究棟）での口頭発表を大幅に加筆・修正したものである。貴重なご意見をいただき、諸先生方にお礼を申し上げます。

- (1) 柳田國男「妖怪名彙」 小松和彦校注『新訂 妖怪談義』
角川学芸出版 二〇一三年による
- (2) 笠井新也「首きれ馬の傳説」「人類学雑誌」第二十七卷第
三号 一九一一年
後藤捷一「首切れ馬の話」「土の鈴」第十一号、九二二年
佐々木喜善「馬首飛行譚」「郷土研究」第五卷第一号
一九三一年
佐々木喜善「馬首農神譚」「郷土研究」第五卷第三号
一九三一年
佐々木高弘「民話の地理学——妖怪文化の民俗地理 I
——」古今書院 二〇一四年
佐々木高弘「怪異の風景学——妖怪文化の民俗地理——」
古今書院 二〇〇九年
佐々木高弘「伝説と共同体のメンタルマップ——徳島県
美馬郡脇町の「首切れ馬」伝説を事例に——」小松和彦
編『怪異の民俗学 2 妖怪』河出書房新社 二〇〇〇年
(初出は「地理学報」二八 一九九一年)
小野光晴「四国における「首切れ馬」伝説の分布」徳島地
域文化研究会「徳島地域文化研究」第二号 二〇〇四年
永吉慶子「トシドンと首なし馬伝承」昔話伝説研究会編・
発行「昔話伝説研究」第二十五号、二〇〇五年
拙稿「身体欠損のある馬の怪異——首切れ馬を中心に——」
——「昔話伝説研究会編・発行「昔話伝説研究」三十四号
二〇一五年
南方熊楠「首なし馬 The Headless Horse」飯倉照平編
『南方熊楠英文論考「フーツアンドクエリーズ」誌編』集
英社 二〇一四年による
(3) 拙稿「身体欠損のある馬の怪異——首切れ馬を中心に
——」昔話伝説研究会編・発行「昔話伝説研究」三十四
号 二〇一五年の表にいくつかの事例を加えたもの。
(4) 後藤捷一「首切れ馬の話」「土の鈴」第十一号 一九二二年
(5) 注(4) 同書
(6) 『奄美の情熱情報誌「ホライゾン」三十三号 ホライゾン
編集室 二〇一一年
(7) 民話と文学の会編「季刊民話」第7号 一声社 一九七六
年
(8) 常光徹『土佐の世間話 今朝道爺異聞』シリーズ・日本の
世間話④ 青弓社 一九九三年
(9) 石川明範「足利市板倉のカミノオカエリについて」下野民
俗研究会編・発行「下野民俗」二十八号 一九八七年にも
記述がある。
(10) 柳田國男「祭りから祭礼へ」「日本の祭り」角川学芸出版
昭和四四年による
(11) 柳田國男「遠野物語」『新版遠野物語 付遠野物語拾遺』
二〇〇四年 角川学芸出版による。ただし例外もある。そ

の前段一〇二には「正月十五日の晩を小正月という。宵の
 ほどは子供ら福の神と称して四五人群を作り、袋を持ちて
 人の家に行き、明の方から福の神が舞い込んだと唱えて餅
 を貰う習慣あり。宵を過ぐればこの晩に限り人々決して戸
 の外に出づることなし。小正月の夜半過ぎは山の神出でて
 遊ぶと言ひ伝えてあればなり。山口の字丸古立におまさと
 いう今三十五六の女、まだ十三の年のことなり。いかな
 るわけにてか唯一人にて福の神に出で、ところどころをあ
 るきて遅くなり、淋しき路を帰りしに、向うの方より丈の
 高き男来てすれちがいたり。顔はすてきに赤く眼はかがや
 けり。袋を捨てて遁げ帰り大いに煩いたりといえり」とい
 うものがある。「世間話・伝説・昔話」を区分するのは時
 間であるから（長野晃子「事件と物語（人生譚）」——
 世間話の定義の指標（3）」世間話研究会編・発行「世間
 話研究」8号 一九九八年）これは日付があつても世間話
 である。

- (12) 松平春嶽全集編纂刊行会「眞雪草紙」『松平春嶽全集
 (1)』原書房 一九七三年による（初出は一八八一年）
 一八八三年
- (13) 寺門良隆「首無し行列の話」「郷土研究」郷土研究社 二
 卷九号 一九一四年
- (14) 杉原丈夫『越前の民話』福井県郷土誌懇談会 一九六六年
- (15) 河合千秋編『福井県の傳説』福井県女子師範学校内郷土研

究部 一九三六年

- (16) 『南越民俗 複製版』安田書店 一九七五年（一九三九年
 までに該当箇所の掲載）
- (17) 田中貢太郎「首のない騎馬武者」『新怪談集 物語編』改
 造社 一九三八年
- (18) 注(15) 同書
- (19) 大洲の昔ばなしと里うた編集委員会『大洲の昔ばなしと里
 うた』大洲市教育委員会 一九九三年
- (20) 大西生徒会収集 瀬野光春 谷口岩雄 阿部晏之編『大西
 の伝説』大西中学校 一九七一年
- (21) 大船渡市史編集委員会『大船渡市史』四卷 大船渡市 昭
 和五十五年
- (22) 佐藤清明『現行全国妖怪辞典』中国民俗学会 一九三五年
 また爪を隠す対抗策については常光徹（しぐさの民俗学
 ——呪術的世界と心性——『ミネルヴァ書房二〇〇六年』
 に指を「隠す」しぐさについての論がある。）
- (23) 野村純一「口裂け女」その他『日本の世間話』東書選書
 一九九五年
- (24) LINEアカウント乗っ取りについては Yahoo! JAPAN
 知恵袋 (http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13134202933) 二〇一六年八月一日閲覧
 二〇一四年八月十四日の質問に「最近LINE乗っ取り詐欺
 が流行ってますね。その対処方法として色々な返し方があ

りますがその中で『天安門事件』と返答して対処している方法があったのですが、天安門事件とは何ですか？それとなぜ天安門事件と返すだけで対処できるのですか？」という質問がある。「line」の件ですが、カードを買ってくれだの言ってくる人（じつは知り合いを装った乗っ取り犯）の文章が、どうも日本人の書いたものではない（言い回しがおかしかったり、ぎこちなかったり）と怪しんだ人が、「なんかお前、日本語おかしいぞ？ 本当に○○か？」と返信したり、これは中国人かも？と感じた人が、試しに「天安門事件」と返信したら、頻繁に「カードを買ってくれ」「早く買ってくれ」「まだか？」と催促してきたものが、それ以降ぱったりとなくなったので、「ああやっぱりあれは○○じゃなかった、中国人だったのか」と思った、ということです。」との回答が寄せられている。

(25) 注(1) 同書

(26) 小松島市史編纂委員会編『小松島市史風土記』徳島県小松島市役所 一九七七年

(27) 井之口章次「妖怪の地域性」『日本の俗信』弘文堂 一九七五年

(28) 一例をあげる。斎藤純「伝説・世間話の交錯と異伝の成立——奈良県吉野郡吉野村の事例を中心に——」(世間話研究会「世間話研究」一号 一九八九年)には中世の土豪である小川氏を主人公としていたしめなわをはらぬ由来の伝説が

存在していたが、天誅組に置き換えられているという事例がある。天誅組を主人公とする伝説の各異伝は、世間話が伝説にとりこまれて成立した、あるいは、世間話が伝説に侵入して成立した伝承があるという。

(29) もちろん、花部英雄「船幽霊の型」(小松和彦編『怪異の民俗学2 妖怪』河出書房新社 平成二〇〇〇年)では「船や幽霊に関する信仰はさて置いて、船幽霊の話について、その型の選定に照準を合わせていくことにする。その結果、単なる信仰的事実をバックアップするような形でしか扱われてこなかったこの種の世間話についても、新たな視点を見つけていきたいと考えている」というような例もある。

(30) 飯倉義之「(口承)の中の妖怪」小松和彦編『妖怪学の基礎知識』角川学芸出版 二〇一一年

(ながしま・ひろき／昔話伝説研究会)